

# 薬で「衝動制御障害」も

4/5

## パーキンソン病と歩む

医療ルネサンス No.6937

パーキンソン病を患う横浜市の高垣照雄さん(67)は今、模型のログハウス作りで熱中している。材料となる割りばしを木工用の接着剤でくっつけ、牛乳パックなどで作った型紙に貼り合わせる。パーツが次々とできあがっていく。



模型のログハウス作りに取り組む高垣さん(横浜市)

「集中していると手の動きもスムーズで、それがいい。指先のリハビリにもなります」。2か月前に始めたばかりだが、すでに17個のログハウスを作った。夢中になれることを見つけたのは、理由があった。高垣さんは、民間企業を定年退職する5年前の2006年頃、右の手足が動かしにくくなった。右手の振りが小さいと指摘されるようになり、病院でパーキンソン病と診断された。脳内で、体の動きの調節に関わる神経伝達物質のドーパミンを受け取る組織に働く「ドーパミンアゴニスト」

や、ドーパミンを補充する「レボドパ製剤」を飲むと、震えは抑えられた。ところが、これらの薬を飲み始めてしばらくした頃、パチンコ店に出かける回数が増えていった。朝ごはんを食べると自宅を出て、閉店までパチンコ台に向かう。やがて借金を背負い、その額は1、2年で約50万円に膨れあがった。治療薬の影響でこうした症状が出ることは知っていた。だが、震えなどの症状は落ち着いていたため、薬の量は変えたくない。

「周囲の人をがっかりさせてはいけないから」と話すが、週1回程度にしている。「性欲が異常に増す。ギャンブルへの欲求が止まらなくなる。衝動的に買い物をしてしまう」。パーキンソン病患者が治療を続けていると、こうした「衝動制御障害」と呼ばれる症状がみられることがある。ドーパミンは、達成感や快感にも関わっている。薬により、ドーパミンの量が増えると、過剰な達成感や快楽を得ようとしてしまい、症状が出てしまうのではないかと考えられている。

挑戦するものを見つけたら、パチンコにのめり込まずに済むのではないかと一念発起した。ログハウス作りもその一つ。他にも野菜作りやグラウンドゴルフなどに取り組む。毎年新しいことに挑んでいくことと決めている。

「パチンコは楽しむ今でも」。東京都立神経病院(府中市武蔵台)脳神経内科医長の沖山亮一さんは、「効果がゆっくり長く続くアゴニストを使っている人などに起きやすい。薬の量は減らさずに、種類を変えるなどして対応できるため、主治医に相談してほしい。ほかに趣味などを探すことも重要です」と話している。

### くらし 家庭

「病院の実力 2018総合編」が発売中。一般書店と読売新聞販売店で扱っています